

(西之表市現和字下剝峯)

位置と環境

西之表市の東海岸に注ぐ安納川と、長さ約1.5kmの小川に囲まれた標高42mほどの丘陵地に位置している。

調査の経緯

県営團場整備事業に伴う文化財分布調査を、昭和47年9月から数次にわたり県教育委員会が実施し、赤木、下剝峯、大四郎、内和の4か所が散布地として確認された。そこで埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るため、西之表市教育委員会が調査主体となり、鹿児島県教育委員会の協力を得て昭和52年末から53年初めにかけて発掘調査を実施した。

遺構と遺物

調査の結果、縄文早期・前期、弥生時代の3文化層が確認された。

遺構は、縄文時代早期の集石が2基検出された。

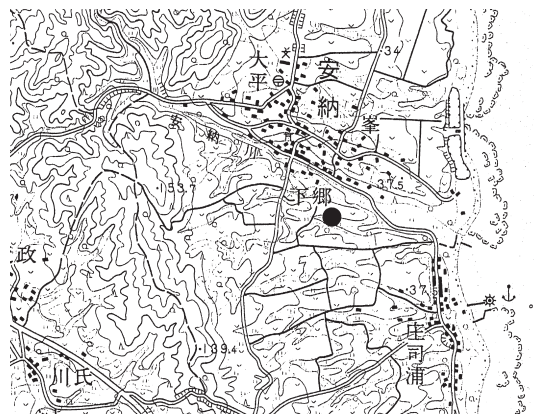
縄文時代の土器は、吉田式土器、轟式系土器をはじめ7種に類別されるものが出土しているが、なかでも特記すべきものは、それまで出土例がなく、下剝峯式土器と呼ばれるようになった、貝殻の腹縁を押しつけて文様をつけた土器が出土したことである。また、沖縄から運び込まれたと思われる室川下層式土器も出土している。

弥生土器は弥生時代中期に該当するものが出土している。

石器は、磨製石斧、打製石斧、敲石、磨石、磨製石鏃、靴形石斧が弥生時代の土器に伴って出土している。



写真1 出土した下剝峯式土器



第1図 下剝峯遺跡の位置

特徴

本遺跡において、特筆すべきことは、貝殻の腹縁を押しつけて文様をつけた下剝峯式土器が出土したことと、種子島で初めて出土遺物と火山灰の関係が明確に把握された遺跡であるということである。また、沖縄との交流を示す室川下層式土器が出土したことも注目される。

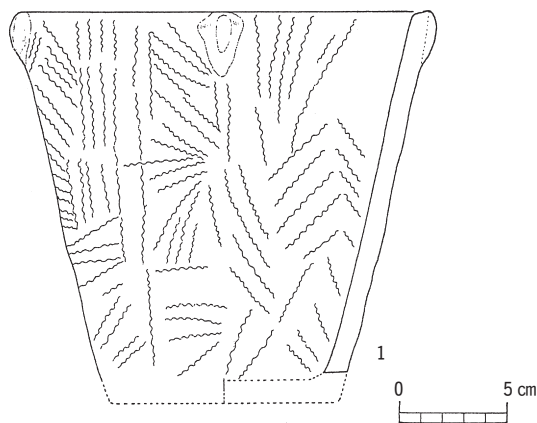
資料の所在

出土遺物は、種子島開発総合センターに展示・保管されている。

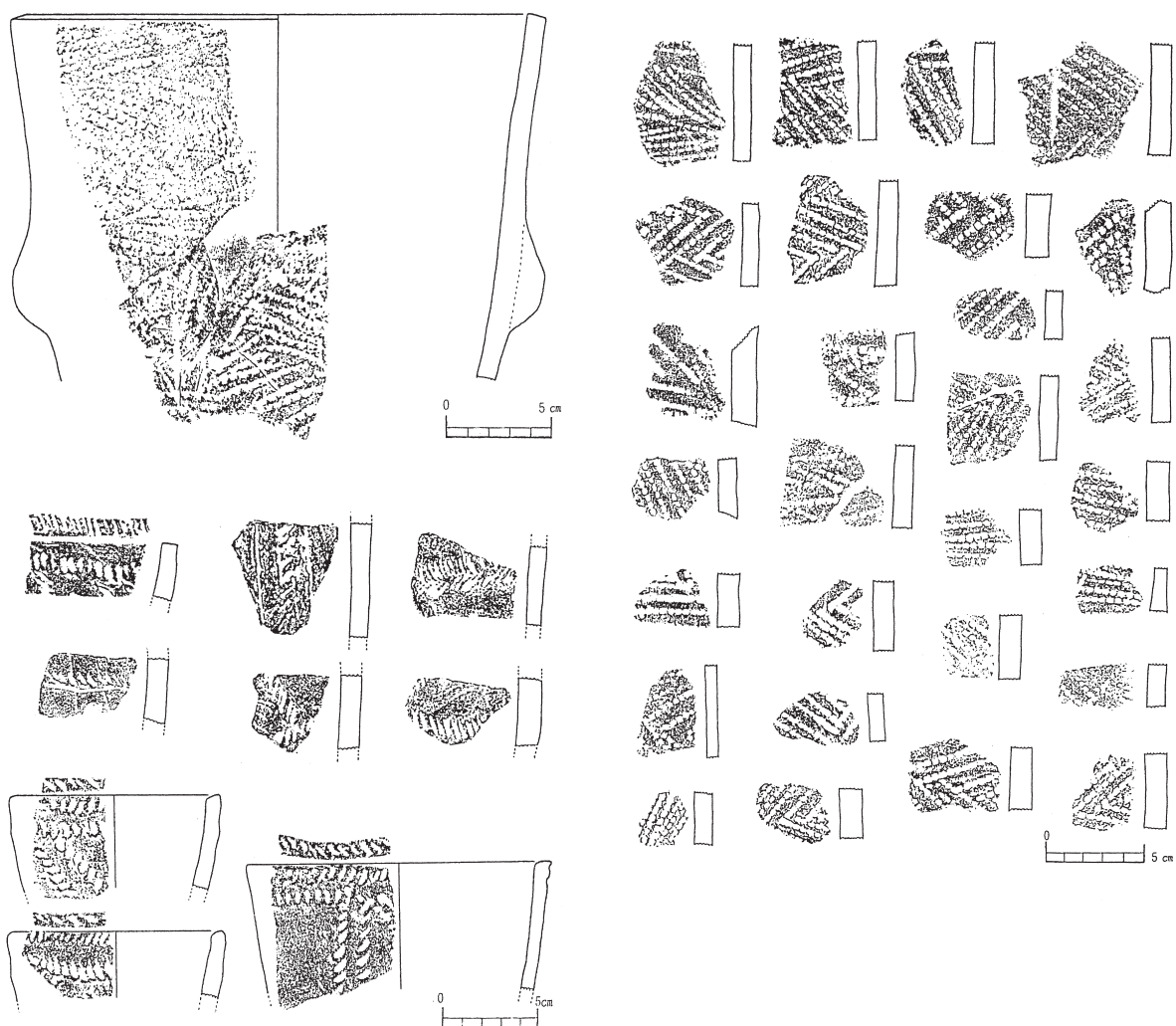
参考文献

西之表市教育委員会1978「赤木遺跡・下剝峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』1

(沖田純一郎)



第2図 実測・復元図



第3図 出土遺物